

# 文化圏を越える口承文芸

## —座頭昔話と早物語から—

### 一、はじめに

本稿では、新しい地に伝播して変容し、芸能化する口承文芸として、座頭昔話と早物語の例を紹介し、あわせて異文化圏伝播の問題を検討してみようと思う。

座頭は、室町時代の盲人琵琶法師の座の役目の一つかつたといわれ、近世には僧侶姿の盲人の琵琶ひきをいった。南九州では座頭をザツツといい、戦前までは門付けして回り、琵琶をひいて聞かせるザツツもよく見るものであつた。いっぽう、女性盲人の三味線ひきの門付け芸人である瞽女は、方言でもやはりゴゼといつて、「川辺ザツツ、知覧ゴゼ」などといつていた。

薩摩・大隅・日向・諸県の盲僧を家督といい、一般にカトツ

どんという。家督は、元龜三年（一五七二）、島津氏と伊東氏の争いである木崎原合戦<sup>きさきはらごくせん</sup>でスパイ活動をし、島津氏の大勝の因をなしした盲僧達の功を賞し、領主島津義弘から土地・寺院と一緒に一戸一升の米をもらう権利を与えられ、その権利は家督相

続されたのにちなむ呼称だといわれている<sup>(1)</sup>。これらの座頭、家督、瞽女はすぐれた口承文芸の伝承者でもあつた。筆者も実際にこれらの方々に会い、民謡や昔話、早物語など聞いた。

知覧町横井場に住んでいた折田貞蔵（明治二十六年生）は、幼くして盲目になつた人で、各地を回つて按摩をした。そしてたくさんの昔話を知つておられた。この人はザツツではなく、按摩であつた。菱刈町荒田の富貴島順海（大正五年生）は家督<sup>かぶ</sup>どんで、盲僧琵琶の名手であり、昔話の伝承者でもあつた。財部町大川原の荒武タミ（明治四十四年生）は、ほんの少し日が見えた少女時代は子守りをし、のちゴゼもして、昔話や民謡をたくさん聞いて憶えたといわれた。

### 二、ザツツむかし

これらの方々の語られる昔話に、ザツツむかしという一群がある。座頭の登場する昔話は、『日本昔話名彙』や『日本昔話

## 下野敏見

集成』、『日本昔話通観』にも多数収録され、笑い話として、あるいは「座頭の頓知」として、また「大歳の客」の主人公として話されている。その分布は青森から南九州まで本土各地において現れている。『日本昔話名彙』には、「盲人が昔話の伝承に関与していた証拠は、彼を主人公とした一癖ある改作話に最も明らかに現れている」と記しているが、南九州では、盲目のかれらがザツツむかしを好んでしゃべり、皆を笑わせたのである。

ザツツやゴゼたちは自嘲をこめて語るのだが、その内容ははじめじめしたものではなく、からつとした頓知譚であることが多く、ザツツは内心誇りを持って話していたのである。

### 1. 南九州のザツツむかし

坊津町泊の貴島操（女性。明治二十五年生）は盲目ではなく普通の人で、ザツツを主人公にした昔話を話した。坊津方言で一語一語、ポツン、ポツンと、かみしめるようにいわれた。聞き手はよく考えながら聞かねばならない。これは一種の知能テストであり、早く笑い声が上がるのがよい。紙数の都合でその題目のみ記すが、貴島は、「二年子（ザツツと琵琶）」のほかに、「ザツツと餅つき」の話と、「ザツツどんの一口ばなし」を話してくださった。<sup>(2)</sup>

次は、折田貞蔵の知覧弁による昔話。折田は、「簾笥けえ櫃ひつ」のほかに、「小僧と小座頭」というザツツむかしも話された。これも笑い話であった。

「ザツツと琵琶」については、穎娃町青戸の西篤（明治二十六年生）も話された。西は普通の人であった。坊津町泊の鹿島八ヤ（明治二十三年生）は、「ザツツどん」のテーマで話された。ハヤも目は不自由ではなかつた。

有明町蓬原の西山太吉（明治二十三年生）は、「ザツツどんの宿」と「ザツツどんの川渡り」、「ザツツどんの山越え」の三つのザツツむかしを話された。目は丈夫であった。「ザツツどんの宿」は、「大歳の客」と同系の昔話。「ザツツどんの川渡り」は、ザツツ二人が川を渡るとき、一人が橋から落ちた。もう一人がどうしたと聞くと、落ちたザツツが頓知で答えるという内容で、先の「二年子」と似た話である。

この話は、西山が數えの十二、三歳のころ、父の徳田十助（安政二年（一八五五）生）より聞いたという。もう一つ「ザツツどんの山越え」も面白い話であるが、これは母の徳田キンズル（万延元年（一八六〇）生）より聞いたという。西山は、婿養子に入ったので両親と姓がちがつた。一人連れの座頭や座頭の川渡りの話は佐賀県にもあることが、宮地武彦氏の紹介で知られている。<sup>(3)</sup>ところで、奄美に「ザツツどんの川渡り」と同じテーマの芸能があるのだが、両者はどんな関係にあるのだろうか。

### 2. 奄美的ダツトどん芸能

奄美方言で、座頭をダツト、またはガツトと言う。座頭芸能は奄美大島の瀬戸内町諸鈍<sup>しょどん</sup>と同町油井<sup>ゆい</sup>の二カ所に伝承されている。

奄美は沖縄・宮古・八重山と共に琉球文化圏を構成し、吐噶喇列島以北のヤマト（本土）文化圏に対応している。ともに日本文化には違いないが、ヤマト南九州のザツツの川渡りは、奄美ではどう展開されるのだろうか。

### （1）諸鈍のダットどん（「ダットどんの川渡り」）

旧暦九月九日、加計呂麻島諸鈍の大屯神社境内で、諸鈍シバヤが行われる。その芝居は、十一種目がある中で、真ん中近くにダットどんが組まれている。このことで、その内容が大方はわかるようであるが、それは笑いの芸能であり、南九州昔話のザツツむかしと同じ内容の芸能である。

諸鈍シバヤはいすれも踊り子が楽屋から出てきて境内で踊り、そして楽屋へもどるという形式であり、その間、楽屋とは別に設けられた場所から樂人達が三線さんしんを鳴らし、拍子木、太鼓を打つて掛け声をかける。

ダットどんは、白い股引に黒上着、円錐形の浅い笠、仮面、はだしという姿で杖を持ち、三線を右肩がけに背負っている。ダットどんは、自分のだいじな三線がいつのまにかすりかえらされているのに気づき、それを探し求めて歩いていると、川向こうからよく似た三線の音が聞こえてくる。その音を頼りに川を渡ろうとして、石を投げて川幅を知ろうとしたり、杖を差し込んで深さを知ろうとする。そうしているうちにおなかがおかしくなって、とうとう藪のそばに行つて、広い葉っぱで用を足す仕草をする。それを面白おかしく演ずる。という内容で、脇か

らの樂は奏ぜられるが、本人は終始無言の一人芝居。これも尾籠な話の狂言であるが、白日のもと、大觀衆の前で演するとき、座頭の哀れさよりもその好演戯が大向うに受けて爆笑を引き起こすのである。そして、諸鈍シバヤ全体の中だるみに活を入れ、盛り上げるのである。

ダットどんの演戯中、三線入りの掛け声がかかる。  
「ハア、ダットどんなどこか。ハア、川ん淵ふちや此処くまじや」  
これをずっとくり返す。

### （2）油井のガットどん（「ガットどんの川渡り」）

旧暦八月十五夜の日、昼、油井ではイビガナシを祭る公民館の庭で、豊年祭りが行われる。その順序を見ると、ガットどんはここでも中頃に位置している。

以上のうち、土俵上で行われるのは、相撲と稻刈り・米つきの稻作芸能だけである。稻摺りは土俵の外の庭でやる。油井豊年祭の芸能はもともとは相撲と稻作芸能が中心であつたことを示す。土俵上でやる神聖な演技に対し、庭でやる芸能はあとから加わった余興芸能であると見ることができる。ガットどんの川渡りももちろん余興芸能であり、どこからか伝来した芸能を加えたものであることは明白。

ガットどんの服装は諸鈍に似ているが、黒褐色の股引に上着、房の付いた三角錐状の笠、仮面、はだしという姿で、長い杖を持ち、三線を左肩がけに背負っている。やはり、川を渡り、脱糞するのであるが、芸能が諸鈍よりも大振りであり、觀衆もいつも

そう湧く。

では、薩摩の座頭芸能との関係はどうか。先に紹介した西山太吉の「ザツツの川渡り」とテーマは同じ。ただ、西山の話はザツツ二人の知恵較べふうの頼知譚であつた。なお、これも前に記したように、座頭の川渡りは佐賀にもあつた。そして、糞尿譚は、折田貞蔵の「筆筒けえ、櫃けえ」にあつた。ザツツむかしはこのように、川渡りや糞尿譚と同じやすいのである。このように考えると諸鈍と油井に伝承されている座頭川渡り芸は、南九州、薩摩から伝わったものと考えるのが自然であろう。それにダットどん、ガットどんの「どん」を付けていう言い方は薩摩ふうである。さらに、座頭昔話と座頭芝居とどちらが先かという問題については、この二例を通して見る限り、昔話が先で芝居はあとだといえよう。

諸鈍シバヤと油井豊年祭の芸能は、沖縄系芸能とヤマト系芸能が混在しているなかで、ダットどん・ガットどんは、ヤマトそれも薩摩系芸能であり、しかもヤマト昔話のザツツむかしが奄美に入つて、語り部分は消えて、代りにその内容が芸能化し、一人芝居として開花したのであるといえよう。

### 三、ザツツと早物語

早物語は、大話や数え話、合戦ものなどを早口で面白く語るもので、ヤマトでは東北地方によく伝承されている。

1. ヤマト文化圏の早物語  
菅江真澄は、文化六年（一八〇五）、秋田の早物語を「ひな」と「ふし」の中に十種ほど記録している。<sup>(4)</sup> 安間清氏は、その著『早物語覚え書』の中に、東北地方をはじめ各地の早物語を収録し研究されている。<sup>(5)</sup>

早物語は東北地方を中心として知られていたのであつたが、昭和五十一年（一九七六）、筆者が『海南民俗研究』一号に種子島の早物語十余種と早口歌謡数種を発表したところ、意外に大きな反響があつて問い合わせが相ついだ。<sup>(6)</sup> そして野村純一氏は『昔話の森』に一章を設けて論じてくださつた。<sup>(7)</sup>

#### （1）早物語とは

柳田国男監修『日本昔話名彙』には、早物語を「琵琶法師の語りの合間に、その弟子などが早口に語つたもの。……「てんぽ物語」などというのも同じもので、暗記と口豆を競うものである」と記している。

安間清氏は諸史料をもとに、

「琵琶法師などの口頭の文芸者が、口で語るという技能を修練し練磨するために、早物語を練習したものであつたらしくことが、効用の一つとして考えられる」

「まだ若い盲目の弟子たちは、平家物語の口演を習う前に、まず小歌や早物語を習つたものではなかろうかと思われ、これはつまり琵琶法師としての修行のためであつただろう」

と述べておられる。<sup>(8)</sup>

## (2) 種子島の早物語

種子島では早物語を「ロッポウ」という。ロッポウは、歌舞伎役者が大振りで歩くのを六法といいうのにちなむものか。または、江戸の侠客を六法者といつたがそういう意味か。種子島のロッポウ話は大詰が多いことからすれば、前者の大振りな六法の意味に解するのが良いようだ。

種子島のロッポウには、次のようなものがある。

- ①赤坂源兵衛、②鉈ロッポウ、③嫁取りロッポウ、
- ④大物語、⑤鰻ロッポウ、⑥その他。

さらにはかに、ロッポウをめぐる早口歌謡や舞には、次のものがある。真中づくし、阿保陀羅經、座敷舞、カラス口説、小学読本読み。以上の①～⑥のロッポウは本州各地の早物語と共に通するものが多い。したがって、種子島で生まれたものではなく、本州から伝わったものである。それが九州には少なくて種子島に吹きだまっている感じである。小学読本読みは一年から六年までの読本を全部そらんじて早口で読む。

では、種子島では、早物語はどんなふうに語られているか、事例を挙げてみよう。

「赤坂源兵衛」<sup>(9)</sup>

「外題は、赤坂源兵衛願い申す。」

東西東西、国を申さば（注、その国名を欠く）、赤坂源兵衛といわれまするエビ獲りの大名人がおられましたける。こ

の人の下周り（畠の隅）に、桑の木が榮えるとも榮えんとも、四十や八やほうにひろがりましたける。一番の軸頭の枝に、アラシタトウの鳥にて、チンチンカラコウ、チンカラコウと、ほけるともほけらんとも、ほけるともほけらんとも、ほけられましたける。

赤坂源兵衛がこれを射ろうやーと思つて、ツン（辻＝天井）に煤を打つ拂い、張り縄にしようもん（するもの）なし。七色映えの馬ン繩を打つぱげて、ヤリ（矢）にしようもんなし。撫き臼打つぱげて、引いて七日、婿めて七日、二七は十四日に、弓を離されましたところが、この矢が行くとも行かんとも、梅木山はうめーて通り、繁木山はしげーて通り、西の海にチャツプリコウ、東の海にチャツプリコウ、鯨しゃちはこの頭を揺い割つて通り、キービナゴの頭などの目を射つちえ、キビナゴが寄るとも寄らんとも、寄るとも寄らんとも、寄られましたける。西の海人群統、東の海人群統、手籠、笊、引っ提げて、拾うとも拾わんとも、拾われましたける。これを塩辛に、肥前甕千四、五四、五本と漬けられましたける。

聟といふものは、なかなか可愛いもので、あすこの聟もこい、こここの聟もこいで、舐めさせられましたところが、喉がかわいいたようすで、前の小池など振り屈うで、呑まれましたところが、喉にかかったようすで、コ、コ、ココ、ココココ、ココッと、息をひかれましたところが、大きなコツテー牛（牡牛）なんど一を、七、八匹、吐けられましたア話でございます。」

以上、種子島ロッポウの代表例である。ありそうもない作り話で大話である。

ほかに「武右衛門」<sup>ぶえいもん</sup>という話もある。

ところで、種子島のロッポウに対して、東北地方では早物語をテンポウ物語ともいう。もつとも、鹿児島でもテンポ錢などといえば愚か者をさすが、天保錢の質が悪かつたのにちなむという説もある。

### (3) 薩摩の早物語

早物語は薩摩でも語られていた。昭和四十七年（一九七二）薩摩郡薩摩町中津川で、明治十八年生の木下伸右衛門から聞いたが、薩摩での採集例は筆者のこの一例のようである。<sup>(9)</sup>

#### 〔正月二日の初狩〕

「さて、日向の国には孫六左衛門」というて、なかなか狩の名人がおられました。正月二日の初狩のことなれば、日立ても見らんにやならん。「こちら、内方の千龜、万年曆は何処おいたか」「あれはもう、子供ん衆しよしよが朝晩おもちゃにして、もう何處どけおいたか分りませんが」。えーとあしこに一枚、ここに一枚、取り出されまして、それを孫六左衛門殿が見られましてエ、「ああこれはア、前まへよいか後うしよよいか前まへえ、えー、東ひがしじよか西に、西にじよか東ひがし、これは妙な話はなしじやが、どうしても日立てんままだよかろう」とー、……」。

この早物語を、伝承者の木下は霧島方面からやつてきた人に聞いたと言つた。霧島は霧島修験の拠点である。宗教者であつ

たと考えられる。その人が盲人であつたか目あきであつたかは、うつかりして確かめなかつたが、家督どんのような人であつたかもしれない。

昔江真澄は「ひなのひと一ふし」の中で、「いではみちのくぶり亡ぬ瞽しゆ人物語（世にはやものかたりといふ）」と記して、大話物語を一つ紹介している。みちのくでは、十九世紀初頭、盲目の人めいもくじんが早物語を語っていたのである。種子島ではすべて目あきの大人が筆者に語つてくれたが、安間氏も述べているように、早物語もまた盲目の人と深いつながりがあつた。

## 2. 吐噶喇列島の狂言「肥後の國」

行政的には鹿児島郡十島村に入る吐噶喇列島口之島の益踊のとき、弓を持った若者が、テラ（墓地内の無人寺）の庭で、島民注視の中で、「肥後の國」の口上を大声でゆっくり述べながら一人芝居じゆぎようを演ずる。

「赤坂甚兵衛」という人がおりました。その人が一里余りの大きな屋敷を持つております。その屋敷の東の方の妻に、大きな大木があります。その大木の一の枝に、チンカラコウ、カラコウという鳥が大きな巣を組んでおります。その鳥のダンバラだんばらを射うち通さんと思ひけり。弓にするものがなし。八幡の梁竹はりだけをおつ取り、弓にし、弦に掛けるものがなし、八幡の注連縄しめなわをおつ取り、弦に掛け、矢にするものがなし、八幡の

杵をおつ取り、矢にし、その根巻きにするものがなし、八幡の挽き臼をおつ取り、矢の根巻きにし、これでいよいよ準備ができました。引いて七日、矯めて七日、二七、十四、十四日の朝、チリチリパツと、見事に島落ちました。上には注連縄、十文字延え渡し、西の浜駆け回り、東の浜駆け回り、西の浜船人ども喜ばせ、東の浜船人ども喜ばせ、丹後の神（國）はたもうて通る、駿河の国はすもうて通る、キビナゴの塩辛、一万七、八千壺なりけり（になりにけり）

この口上は、昭和四十七年（一九七二）に記録したものである。

口の島のこの狂言について、筆者は、NHKあるさとの伝承で、放映された口之島の「先祖が二度くる島」の映像に関する解説文として「オヤダメ祭りと盆踊と綱引きの島」と題して書いた。<sup>10</sup>その中に、この狂言が種子島の早物語と関連することを指摘し、種子島の早物語が口之島に入り、狂言化したものではないかと述べておいた。

この「肥後の国」は、先に挙げた種子島の「赤坂源兵衛」と「武右衛門」の両者に共通する文句が各所にあり、まちがいなく同系の話である。その「チンカラコウ」、他、種子島の方言口調が残っていて、これが種子島をへて伝来したものであることがわかる。

中世から近世に至る間、種子島と吐噶喇列島の関係は、従属関係にあつた臥蛇島をはじめ、流人、漂着、交易、寄港などを通して密接な関係にあつた。口之島に限らず、平島、宝島などとの

交流もいくらでも指摘できるのである。したがつて、種子島の早物語の吐噶喇列島への伝播はきわめて容易であつたろう。

ところで、口之島「肥後の国」狂言の芸態は、浴衣、鉢巻、櫻、はだし姿の若者が一人登場し、弓を持って、口上にそつて演技し、森めがけて鳥を射る。そして喜びはねるというもの。口上は、つづけて言わないで、ぱつり、ぱつりと一口ずつ、間をおいていうので、結構時間がかかり、その間、いろいろ所作をするので面白い展開になるのである。

その語り口調は種子島の早物語とはちがつていて、全体の口述は決していそがない。しかし、一語ないし、一二三語をいうときは、早口でいうのである。ここに、もとの早物語の口調が残っているといえよう。したがつてこの事例で見る限り、早物語が先で狂言はあとからできたといえよう。

ヤマト文化圏を南下した早物語は、ヤマトと琉球の接点であり、ヤマト語使用地域の吐噶喇において、語り口が同じ狂言として芸能化したのである。「肥後の国」と同じ文句のヤマトゲチの狂言は、吐噶喇以南の琉球文化圏では見当らない。

しかし、野村純一氏は、「早物語と八重山の「ユングトウ」という力作で、種子島と吐噶喇の早物語を比較されたのち、両者で語られるキビナゴと八重山の干瀬への寄り魚で、アイゴの幼魚であるスク（スル）に関する竹富島の「スル掬（すく）い狂言（きょんげん）」の早物語としての類似性を指摘している。<sup>11</sup>

そして、野村氏は、

「遠く東北の地に認められた「早物語」は、一方で西下南漸し、その行き着く先は種子島の「ロッポウ」、口之島の「狂言」を経て、果ては八重山の「スル掬い狂言」にまで及び、その上でお賀賀しく祭の日の昂奮を盛り立てていたとここでは結論するのである」

と述べておられる。これは重大な指摘である。ヤマト文化圏と琉球文化圏は、共通の日本文化でありながらも、その違いが大きく、その海峡の底は深い。野村氏のヤマト早物語の西下南漸説は、はたして正しいだろうか。次に、ユングトウをめぐつて少しばかり検討してみよう。

#### 四、ヤマト早物語と琉球ユングトウ

ユングトウの語源説はいろいろあるが、「誦み言」と解するのがよいようだ。ユングトウは、奄美、沖縄、八重山に伝承されているが、その地域性について、狩俣恵一氏は次のように述べておられる。

「奄美のユングトウが短詞形で、主として子供の伝承する「わらべ唄」的なものに対する、八重山・沖縄のユングトウは長詞形で、大人によつて祭りの中で歌い演じられる。」「奄美のユングトウは、根底に呪術を保持しながら、動物や自然に人間が呼びかける内容のものとなつていて、そこに遊戯性をも盛り込んでいる。」

狩俣氏は、奄美と沖縄・八重山のユングトウの違いを指摘されながら、次のように述べる。

「八重山のユングトウの源も、かつては奄美的ユングトウと同様であったと想像される。しかし、八重山のユングトウは、祭りの中に取り込まれることによって、奄美的ユングトウとは違う道を歩むことになった。すなわち、八重山のユングトウは、大人たちに管理され続けることになり独自の発達を遂げることになった」<sup>(12)</sup>

『南島歌謡大成V 奄美篇』には、奄美諸島のユングトウが多数掲載されているが、編者の一人、田畠英勝氏は、

「ユングトウとは、本来、神の宣り給う言葉のことと、「誦み言」であろう」<sup>(13)</sup>

と記されている。波照間永吉氏は、大著『南島祭祀歌謡の研究』の中で、ユングトウには謡うユングトウと唱えるユングトウがあつて、後者は早口でユーモラスな言葉を織りませていう、と述べておられる。<sup>(14)</sup>

こうなると、八重山のユングトウの実態は、野村氏の説と接近してくるようだが、ほんとうはどうだろうか。

波照間氏はまた、八重山の一人で唱えるキヨンギン（狂言）について紹介している。それは、「東西東西」のヤマト語で始まり、あとは方言で牛踏みと米の収穫を述べる。ほかにもあるが、話を早物語にもどして考えると、いずれも「東西東西」に始まる。<sup>(15)</sup>でも狂言最初の一<sup>行</sup>の「東西東西」だけで、八重山の

早口のユングトウがヤマト早物語の南下ということにはならないだろう。ただここで、沖縄に大きな影響を及ぼした芸能「京太郎（ちよんだらー）」があるのを忘れてはならない。

『沖縄の祭祀と民族芸能の研究』の大著を書いた大城學氏は、十八世紀初頭にはすでに沖縄で演じられていたヤマト芸能京太郎について詳述し、その演目には「早口説」や「鳥刺し舞」などがあることを紹介している。<sup>(16)</sup> 沖縄のユングトウにこうした芸風が影響したことを考えることができよう。しかしそれが八重山へどう影響したかは分りにくいところだ。そこで筆者は次のように考へる。

琉球文化圏のユングトウは、奄美に残る呪的わらべ唄的なユングトウがもとの形であつたが、沖縄・八重山では狩俣氏のいわれるように、大人が管理する祭りに組み込まれて遊戯性、娛樂性が芽生えて、しかも早口に唱えるものもあつて、言葉は違うけれども形式的にはヤマト早物語と似てきた。

だが、重要なことはたとえ京太郎などの若干の影響を受けたといつても、全体のその語句を検討すると早口のユングトウに影響を与えたらしいヤマト口の早物語の痕跡はなくて、沖縄・八重山で内的に独自に発展したものであると見られるものばかりである。したがつて、決してヤマト早物語が「西下南漸」したものではないと考えるものである。筆者の知る限り、ヤマト語早物語がその一部でも唱えられているユングトウは見当たらぬのである。それは、ヤマト文化圏に属する種子島の「鉈ロツ

ボウ」、その他の分類テーマ上からもヤマトとの共通点は見出せないことでも明らかだ。

八重山の竹富島ユングトウの中から一例を示すと、<sup>(17)</sup>

「米が稔つたら、米が稔つたら、米の稔つているさまは（稻穂が）揺れる生まれをし、（囃略）、粟が稔つたら、粟が稔つたら、粟の稔つてているさまは（粟穂が）垂れる生まれをし、黍が稔つたら、黍が稔つたら、黍の稔つてているさまは（黍穂が）ザーラザーラとし」

こんなぐあいに、米、粟、黍と次々に展開しながら面白くりズミカルに歌う。しかし、ヤマトの早物語とは違う。野村氏がヤマト早物語の西下南漸説の例として出された竹富島の「スル掬い狂言」は、ユングトウではなく、祭りの場での狂言であるが、そこにも言葉の上でヤマト早物語につながるものは何もないようである。

でも、野村氏は、「[ハタキ] 畑クムルぬ 真中下りてイスルゆ 掴るんてい」の文言は、これは紛れもなく早物語、就中、逆さま事、いわばあべこべ物語以外の何者でもない」として、ヤマト早物語の影響を述べておられる。

このことは偶然の相似なのか、伝播なのか、慎重に検討の必要があろう。もし、伝播とすれば、ヤマト狂言の伝播とすべきかもしれない。そうすると、後でも述べるが、「狂言が先か、早物語が先か」の問題にも関わってくる。そして、八重山狂言全体のヤマト狂言との関連の有無の検討とさらにユングトウと

の関連の検討が必要になつてこよう。

さて、ここで昔話の伝播と変容について考えてみよう。昔話は、旧地で使つてた言葉は変わつても、モチーフ群による連續挿話が構成する内容が一つの昔話として新しい地に生きのび、現地語で語られるならば、旧地から新地へ伝播したといえよう。その場合、昔話は土地の事物を借りて伝説化する傾向がある。特に奄美の場合、顕著である。

例えは蛇女房の伝説化した昔話「島原大変」は、喜界島に伝わつて、新地の村や溜池と結びついて、いつそう伝説の粋いをすすめた。<sup>(18)</sup> その話のなかで、「女房の産」「目玉」「加害者」「報復」などのモチーフは喜界島でも語られたが、「鍛冶屋」などの職業と「予知者」九十九島成立の「結果」などは欠いている。その結果、まるで喜界島の伝説のようになつてゐるのである。こうして、「島原大変」は喜界島に伝播して大きく変容したが、まだ共通するモチーフ、内容を保持していたのである。

ところが、野村氏が引用されている伝播先といわれる竹富島の「スル掬い狂言」と、伝播元とされる種子島の「赤坂源兵衛」や口之島の「肥後の国」は、キビナゴに対するスルの語は登場しても、共通するモチーフや挿話はほとんど見当らない。したがつて、話の構造は両者全く似ていないのである。口之島狂言と竹富島狂言の内容も似ていないのである。

それでも野村氏は、竹富島の「スル掬い狂言」をとり上げて、「そこ」での核心はなお早物語の趣向にそのまま通じる中身に

あつたからに他ならない」と述べておられる。

ところで、ヤマト文化圏と接するもう一つの異文化のアイヌ文化(圏)には、早物語がないのか。札幌大学助教授本田優子氏から直接教わった話では、「ウバラパクテ（くちくらべ）」という口承文芸があるという。それは、

「コノル カタボノロケウポ ハーチリ（氷の上に 小さな狼が転んだ）」

に始まるもので、次のように語りついでいく。

「氷が偉いからだよ、氷が偉いのに太陽がとかすの？ 太陽が偉いからだよ、太陽が偉いのにその上を雲が通るの？ 雲が偉いからだよ、雲が偉いのに土にあたるの？……」

ウバラパクテをはじめアイヌ童言葉には呪的、信仰的なものもあるようだ。奄美のユングトウと直接のつながりはもちろんないけれども、列島の古層文化を考えるとき、似通うものがあるかもしれないと思うのである。

早物語はイギリスやアメリカにもあることを、昔話研究者のロバート・J・アダムス氏は、自ら早口で語つて私に教えてくれたことがある。それは広く知られているマザーグース（童謡）の一つで This Is the House That Jack Built に始まる話で、一語一語に力をこめながら次のように語りついでいく。

「これはジャックが建てた家においてあつた麦芽です。」  
「これはジャックが建てた家においてあつた麦芽を食べたねずみです。これはジャックが建てた家においてあつた麦芽を食べ

たねずみを殺した猫です。……」

じつは、この英語早物語は、若いころのロバート氏を案内して再度の種子島早物語を聞いたとき、氏が現地伝承者に語つて聞かせ、一座の人達が大喜びしたのであった。

つまり早物語は文化圏が変わつても、各地にその風土独自の早物語があるということだ。

ヤマト早物語は、滑稽さ、大話、笑いなど、いつそう狂言的であつて、その背景として室町文化をへた社会の所産であると、思つていたのであるが、武田正氏はこういつておられる。

「室町時代になると、大名の城下に開けた町場のほか、港湾などの各地に町場＝都市が発達し、同時に町衆といわれた有力住民が登場するなど庶民層の抬頭が著しく、いわば文化の面での下克上ともいうべき現象が見られる。そうしたなかで、地方領主の近くに住む者たちが、田舎に住むいわゆる田舎者の「物識らず」ぶりを見下す傾向が生まれ、そこに笑話が生成されることになる。そのような笑話に先鞭をつけた一つに、狂言の太郎冠者が見ることができる。……中略……このような太郎冠者が生み出された背景には、当然に下克上の時代ともいわれる室町時代という時代思潮があつたと見られよう。」<sup>19)</sup>

これに対し、琉球ユングトウ、特に奄美のそれは、真実性、呪術性を重視するといいつつ古い社会の所産であると考えられよう。このことについては山下欣一氏の次の言が参考になろう。<sup>20)</sup>

「奄美における民間説話においては、しばしば「虚構の話」と「眞実の話」とは接近し、「眞実の話」への傾斜を示しているといえる。」

「眞実の話」とは、信仰によつて支持されて、なんらかの社会的機能を持つ話群であり、奄美の民間説話は、もともと「眞実の話」のみが話され、価値あるものであったと考えていゝものであろう。」

沖縄は首里を中心とした琉球封建社会をへて、狂言感覚がそれなりにできて、ユングトウにも反映しているのではなかろうか。

こうした視点から見ると、ヤマト早物語の根底にも古い時代には奄美と同じような呪的わらべ唄的性格があつたのではないかろうか。しかし、永い間にヤマトと琉球は違い、琉球の中でも奄美と沖縄・八重山は違つてきたのである。それで、ヤマト文化圏のヤマト語口承の早物語が、種子島や吐噶喇をへて琉球に南下し、琉球語口承のユングトウに大きく影響したことはなかつた。ましてや、ヤマト早物語がストレートに西下南漸し八重山に行きつき、琉球語ユングトウにとつて代わり、あるいは併立して、ヤマト語ユングトウができるなどということはないかつた、と考えるのである。

## 五、むすび

盲目の座頭や家督、瞽女などの口承文芸における役割は大き

かつた。武田正氏もその著『日本昔話の伝承構造』の中で、柳田国男の説を引きながら強調されている。<sup>(21)</sup> つぎにむすびとして要点をいくつか記しておく。

①九州西北部から本州各地にも連なる南九州のザツツむかしは、昔話のなかでも特色のある話群である。そして、素朴な薩摩方言で、ボツリ、ボツリ、と話され、悲しみを秘めながらユーモラスに話すという独特の味わいを見せていく。

それが奄美に伝わって芸能化し、パントマイムの一人芝居<sup>(22)</sup>として演じられ、人気を博している。口承文芸から民俗芸能へと変容し、発展した例である。

ヤマト早物語は、吐噶喇に伝わって狂言化し、やはり一人芝居として祭祀芸能になつた。口承文芸は、新しい地に伝播し、演戯を加えて立体化するという変容をなし、民衆生活により重きをなして生きていく。

②武田正氏の『天保元年やかんの年 一早物語の民俗学』<sup>(23)</sup>は、早物語をまとめた貴重な興味深い本である。本稿を書き終えた段階で読んだのだが、その中に「狂言が先か、早物語が先か」についてふれておられる。本稿の問題としては、もう一つ「昔話が先か、一人芝居が先か」を加えて考えてみると、まず、座頭の川渡りについては、南九州における昔話の語句は、奄美ではすっかり消えてしまい、ただ、掛け声のみになつていて。口承文芸がヤマト文化圏から琉球文化圏に伝播した場合、ヤマト言葉は消えてなくなる傾向がある。それは、言語海

峡が余りにも深いからであろう。したがつて、セリフのあるヤマト昔話が先で、セリフのない琉球（奄美）芝居が後であるといえる。

早物語の伝播は、種子島から吐噶喇列島口之島へと、同じヤマト文化圏内の移動であつて、言語はそのまま流入できた。しかし、くずれた型で伝播している。したがつて、セリフのしつかりした種子島の早物語が先で、口之島の狂言は後だといえる。③ヤマトと琉球の文化の接触交流は、たえずおこっているが、その境界の底は深く、そこを飛び越えての伝播の問題は、さまざまなことを考えて慎重に検討しなければならない。異質の文化圏における文化伝播の比較は重要であり、活発にやらなければならぬけれども、方法が問題である。なお、異質の領域の文化比較はそれを行うことによつて、互いの特色を知ることもできよう。

野村氏が提出された早物語のユングトウへの影響の問題は、ヤマト・琉球口承文芸の比較に重要な一石を投じられたのである。早物語とユングトウの比較は興味ある課題であり、諸角度から今後も試みられなければならないと思う。

また、現段階では突飛に聞こえるかもしれないが、日本古層文化探究の視点からは、アイヌのウバラパクテと奄美ユングトウ、八重山ユングトウの比較をはじめ、アイヌ・琉球口承文芸全般の比較も重要ではなかろうか。

注

- (1) 濑戸山計佐儀編著『都城さつま方言辞典』一九九三 三 州文化社 一九六〇一九七頁。
- (2) 貴島操の「ザツツと餅つき」の昔話は、下野敏見『フオーロア南九州』一九九一 丸山学芸図書 二四三〇二四四頁に収録。
- (3) 宮地武彦「肥前盲僧と昔話」中野幡能編著『盲僧歴史と民俗学論集2』一九九三 名著出版 三三三頁。
- (4) 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第九卷』一九七三 未来社 三〇七〇三四九頁。
- (5) 安間清『早物語覚え書』一九六四 甲陽書房。
- (6) 下野敏見『海南民俗研究1号』一九七六 海南民俗研究所 九〇一四頁。および下野敏見『南西諸島の民俗II』一九八一 法政大学出版局 四四四〇四四六頁。
- (7) 野村純一『昔話の森』一九九八 大修館書店 二二五〇二六四頁。
- (8) 注(5) 同書 二七四〇二七五頁。
- (9) 下野敏見『海南民俗研究2号』一九七七 海南民俗研究所 七二〇七三頁。および下野敏見『南西諸島の民俗II』一九八一 法政大学出版局 四六一〇四六三頁。
- (10) 宮田登・他著『ふるさとの伝承』解説編』一九九七 示人 社 二二六〇二三一頁。
- (11) 野村純一「早物語と八重山のユングトウ」『國學院雑誌』通巻一六一号 二〇〇四 國學院大學 一〇一七頁。
- (12) 犬俣恵一「ユングトウの説話性」岩瀬博・山下欣一編『奄美文化を探る』一九九〇 海風社 二三三〇二四八頁。
- (13) 田畠英勝・龜井勝信・外間守善編『南島歌謡大成V 奄美篇』一九七九 角川書店 七三九頁。
- (14) 波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』一九九九 砂子屋書房 六四一頁。
- (15) 注(13) 同書 三九〇〇二九二頁。
- (16) 大城學『沖縄の祭祀と民族芸能の研究』二〇〇三 砂子屋書房 一六九〇二六六頁。
- (17) 日本放送協会編『日本民謡大観（八重山諸島篇）』一九八九 日本放送出版協会 一三〇〇一三二頁。
- (18) 岩倉市郎『喜界島昔話集』一九七四 三省堂 二八〇三〇頁。
- (19) 武田正『天保元年やかんの年 ー早物語の民俗学ー』二〇〇五 岩田書院 一〇七頁、一一〇頁。
- (20) 山下欣一「奄美の「起源説話」について」昔話研究懇話会編『昔話ー研究と資料』第五号 一九七六 三弥井書店 一六頁、五五頁。
- (21) 武田正『日本昔話の伝承構造』一九九二 名著出版 三〇五頁。
- (22) 注(19) 同書 一一三頁。
- (しもの・としみ／元鹿児島大学)